



ZENBUTSU

金仏

No. 587

仏暦2556年3月
[2013年]



①	②	③
	④	⑤
⑥	⑦	⑧
⑩	⑪	⑫

平成25年 新年懇親会登壇者
①半田孝淳本会会長 ②宮林昭彦本会副会長 ③小林正道本会理事長 ④庄野光昭高野山真言宗宗務総長 ⑤芳村正徳(公財)日本宗教連盟理事長 ⑥マダン・クマル・バツラライ ネパール大使 ⑦自由民主党竹下亘組織本部長 ⑧民主党海江田万里代表 ⑨みんなの党 浅尾慶一郎政策調査会長 ⑩生活の党佐藤公治参議院議員 ⑪村松秀信東映(株)取締役 ⑫菊地冨(株)わらび座営業制作局

目次

- 檀信徒、地域の人に愛されない、信頼されない寺は不幸である
碑文谷 創(葬送ジャーナリスト).....2
- 総務財政審議会中間報告／社会人権審議会中間報告
国際交流審議会中間報告／宗教教育推進委員会中間報告.....4
- 東日本大震災第五次支援金拠出に関するご案内.....7
- 第三回 理事会開催／平成二十五年 新年懇親会開催.....8
- 平成二十四年度 加盟団体顧問弁護士連絡会開催.....9
- WFB(世界仏教徒連盟)合同役員会議に出席.....10
- WFB(世界仏教徒連盟)人道支援委員会主催スタディツアー参加報告...10
- 花まつりポスターのご案内.....12

花まつり

ポスター好評頒布中です！

今年はデザインをリニューアルし、より親しみやすいポスター4種類をご用意いたしました。
いままでなかった、イラストデザインも仲間入りです！花まつりをイメージしやすい仏旗と白象でコーディネート！
また、「ちよつとした隙間に貼りたい」「他のポスターも貼れるように」といったご要望にもお応えし、
サイズが半分になった、ミニサイズもご用意しました。

ミニサイズも増えました

(左より ●白象と仏旗 ●仏像 ●お稚児 ●白象と仏旗短冊Ver)
※上記はデザインのみで実物は下部に余白がございます。
※ミニサイズは横幅が半分のポスターを指します。
※サイズ・費用・申込方法等は本会HPをご覧ください。
※2012年以前のポスターは頒布終了いたしました。

多数のお申込を頂戴し、誠に有難うございます。
お申込はお早目に。皆様の花まつりに是非ご活用ください！

お申込は本会HPまたは右記QRコードから →

※お申込に関する詳細は、本会HPにて詳細をご確認ください。

花まつり絵はがきも無料配布中！

公益財団法人
全日本仏教会
WFB(世界仏教徒連盟)日本センター
ホームページ: 全日仏 検索

◎本件に関するお問い合わせ
(公財)全日本仏教会広報文化部(中村)
TEL:03(3437)9275 FAX:03(3437)3260
e-mail:kouho@jbf.ne.jp

檀信徒、地域の人に愛されない、信頼されない寺は不幸である

葬送ジャーナリスト 碑文谷 創

■賑わいの「寺小屋」

先日、催し案内に載った寺を訪ねてみた。寺のホームページにはさまざまな催しが掲載されていて、今回の「寺小屋」と名づけられた集まりも年二回ほど開かれているようだ。

出がけに急用が入ったために寺への到着は開始時刻を十分ほど過ぎていた。車が寺の敷地にぎゅうぎゅう詰めになっていて、路上駐車を覚悟したが、駐車場係を務める中年の檀徒のはからいで、無事に境内地に停めることができた。もう本堂はいっぱいの様子で、本堂の周り廊下でスピーカーを通して講演に耳を傾ける人もいる。

檀徒の方に「きようはすごい人出ですね」と訊くと、「いや、こんなものいつもだよ。もつと集まる

こともある」と何ら特別の集まりではないという。

本堂に行くと、中年女性の檀徒が「せっかくお出でになったのだから」といちばん前の場所に行つて座るように言う。せっかくの親切なので人をかきわけるようにして前に行き、座る。

講師の話の前置ききの最後あたりだったようで、講師で来た僧侶の軽妙な話に堂内が大爆笑していたところだった。

堂内に漂う空気が温かい。僧侶の酒脱だが本質を突く話に会場がきちんと反応している。高齢者だけでなく若い人だけでもない。文字通り老若男女が入り混じっている。家族揃って来ている人も多いようだ。周囲の人に無理してあけてもらって座ったのだが、妙に居心地がいいのだ。

しかし、他方では、残念ながらそうでない寺もある。

■問題を抱える寺

法話の機会に株の話をした僧侶、自死遺族の前で、死者を軽々に「いのちを大切にしなかった」と非難することに終始した僧侶、家族崩壊の危機にある家族の前で伝統的家父長制を何ら疑問なく説く僧侶、葬儀の予定よりゴルフの予定を優先する僧侶……がいる。

葬式で死者が誰かを問おうともせず、家族の気持ちに耳を傾けることもせず、読経だけ勤めて自分の仕事は終わった、と思う僧侶がいる。寺が「葬式仏教」ですら存在できない危機は、死者への弔いに熱心でない遺族の増加だけに原因があるのではない。死者や遺族のことをきちんと考えず、配慮せずに安直に表層の儀式部分のみを勤めてきた僧侶にも責任がある。

寺の財政の危機に対処しようとしてか、それまでその地では二十〜三十万円程度であった葬式の布

講師の僧侶が「寺は経済、名譽、利害を超えて集まるところだから」と言うとうんうんと頷いている。

寺の良さの一つは、世代も性差も知識も貧富も超越して人々が集まれる場所、ということだと思ふ。こうした寺に共通するのは死者への弔いもおろそかにせず、大切にしていることだ。そして弔いが家族の死者を超えて、一昨年の三月十一日に発生した東日本大震災での死者たちにまで広がっている。

■寺のあり方を巡る論議

これまで寺のあり方についてさまざまな議論がされていた。寺は檀信徒の葬式や法事という葬式仏教に墮しているという批判、地域の苦しみを担う寺でなければならぬという主張。あるいは仏法こそ大切にすべきだという教義中心主義を説くもの。

だがどれかを選択する話ではない。教えを大切にしないで人に説くことは不可能だ。自分が納得で施を、平均六十万円程度まで地域の僧侶が談合して引き上げた仏教会すらある。調べてみると残念ながら事実であった。

地方都市ではまだまだ寺の力が強いので、檀信徒は寺の意向に従って身分不相応の巨額の布施を「払う」ものの、こんなことを続けていたら檀信徒の気持ちは次第に寺から離れていくだろう。寺が布施の額を統一しないのは、檀信徒の生活状況がさまざまであり、それを知る立場にある住職としては、統一金額など提示する無茶はできなかつたからである。寺の財政基盤の確立は重要だが、檀信徒の信を失う策は避けなければならぬ。

大寺院の中には、あたかもブランドであると錯覚し、寺の境内墓は、事実上資産家しか入れないようにしているところもある。寺にあるヒエラルキーがこんな形で現われ、それを不思議とも思わない「ブランド寺院」がある。これはもはや檀信徒用の境内墓地では

きていない教えを説こうとしてもボロが出る。檀信徒や地域の人々の葬式を誠意をもって取り組まないで信頼を得ることは不可能である。このいのちを僧侶は、寺は大切にしてくれている、という信頼と安心なしに寺は存在できない。

また過疎の村の寺、大震災で被災した寺を考えれば、寺・教団が支え合うことなしに個別の寺は存続できないことは明らかである。地方と都市の寺の連携の欠如が首都圏で巨大な宗教的浮動層を生み、それが僧侶派遣会社という奇妙なビジネスを生んだ。

■生き生きしている寺

では寺はすべてが疲弊しているかというところではない。昔と変わらず、否、昔以上に生き生きとした寺が少なくない。そうした寺に共通するものは何か。

一つは、僧侶が檀信徒や地域の人々に自分の言葉で語り、その言葉が人々に生きて語られている点である。教えというのは伝えられさせている。

寺は住職の私有財産ではない。地域の寺としては、幅広く檀信徒の協力者を募って、一緒に寺を運営していく必要がある。一部の資産家や墓園業者だけに依拠していったら寺の方向性を過つ。寺にとつて檀信徒の寺の活動への積極的参加は不可欠である。檀信徒はお客さんではない。檀信徒、地域の人に愛されない、信頼されない寺は不幸である。

碑文谷 創 (ひもんや・はじめ)



葬送ジャーナリスト。昭和二十一年岩手県生まれ。雑誌『SOG』編集長。著書に『葬儀概論』『死に方を忘れた日本人』ほか。